

巻頭言

星城大学リハビリテーション学部

江西 一成

巨人の肩の上に立つ

Google Scholar は、2004 年より Google が無償で提供を始めた学術資料の検索サイトで、その検索ボックスに「巨人の肩の上に立つ」という文言が無造作に書かれています。これは、12 世紀のフランスの学者ベルナルの言葉とされ「現代の学問は先哲によって行われた数多の蓄積の上に成り立っている」ことを意味し、あのニュートンも彼自身の偉業について意見を求められたときに「もし私が他の人よりも遠くを見ているとしたら、それは巨人の肩の上に立っているからだ」と、この言葉を引用したとされています。

さて、理学療法は医療における臨床技術であると同時に、自然科学という学術領域の一員でもあり、どちらも様々な巨人の肩の上に立って日々の研鑽を修めることで今日に至っています。このうち学術研究について考えると、巨人とは関心領域の過去の実績であり、研究時の文献渉猟や先行研究の吟味などに相当します。また、その上に立つ研究者は、自身の能力や技術を研ぎ澄まして巨人の利点を最大限に活用します。そして、十分な内容の両者を備えることで、的確で説得力のある研究成果を得ることができます。

2012 年 10 月 8 日、山中伸弥教授が人工多能性幹細胞（iPS 細胞）の業績によりノーベル医学・生理学賞を授与されました。このことを例えに挙げるのは恐縮至極ですが、まさに巨人の肩の上に立って達成した偉業そのものです。特に、今回の受賞理由は、臨床的意義ではなく共同受賞した JB ガードン教授の 50 年前の実験、すなわちカエルの成熟細胞が受精卵に戻ることで、および細胞の初期化による万能性の獲得、という生物学の根本的課題に答えた発見であったことです。その臨床応用については、今後の計り知れない成果が期待され、山中教授もそのことを視野に入れて研究を推進していることでしょう。研究者としての真摯な姿勢、また臨床医としての感性と志向性に畏敬の念を抱かずにはいられません。まさに、偉大な巨人の肩の上に立った、偉大な研究者といえることができます。

ところで、この巨人と研究者のあり方について、必ずしも両者の条件を満たしていない場合もあります。その一つを、私が従事する教育での卒業研究において度々経験します。学生は、彼らなりに一所懸命なデータ採取と分析等から結論を見出すのですが、往々にして「あなたが知らなかっただけでしょ？」という場面があります。もちろん学生の達成感を否定するわけではないのですが、巨人の存在を認識せずに自分自身の知識や価値観だけに依拠しています。これは、実習ではあっても研究とはいえず、さらに成長しなければいけないものです。また一方で、その逆の場合もあります。その極端な例として、山中教授の受賞と同時期に、同じ iPS 細胞関連でマスコミを騒がせていた自称研究者の所業が挙げられます。これは、より大きな巨人を探し出し、自身の努力なし（間違った努力はしている・・・）に、単にその肩の上に乗ったということで、研究以前の論外のことです。これらは、本来、研究と呼べるものではないのですが、私たちの身近にある落とし穴のように思えてなりません。

研究とは、諸手続きを経て自らの主張を他者に示し、多数からの同意と支持を得ることです。これは、理学療法の根底に通じるもので、その危うさと重要性を再認識した最近の出来事でした。